ISSN　1344-9095

TOHOKU UNIVERSITY

東北大学　東北アジア研究センター　ニューズレター

The Newsletter CNEAS

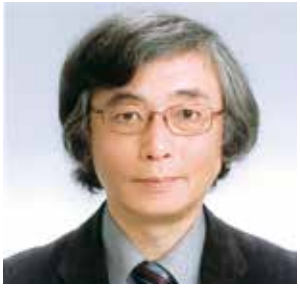
第 72 号

●目 次●

巻頭言　人の流れと東北アジア……1
最近の研究会・シンポジウム等
　東北アジア研究センター公開講演会「北東アジアの環境：文化的認識と政策的関与」……2
　人間文化研究機構 北東アジア地域研究推進事業　東北大学東北アジア研究センター拠点国際シンポジウム
　「北東アジアの環境：文化的認識と政策的関与」……2
　　Session A　環境問題への文化的認識と介入の今日的意義……2
　　Session B　東北アジアにおける国際環境協力のための科学とは：渡り鳥とその生息地を事例に……3
　　Session C　北東アジアの環境問題と環境政策……3
　東北大学東北アジア研究センター「東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット」
　第 4 回・第 5 回・第 6 回共催講演会……4
　東北アジア研究センター共同研究「東日本大震災後のコミュニティ再生・創生プロセスと持続可能性に関する
　実証的共同研究」2016 年度第 2 回研究会……5
　伊達市噴火湾文化研究所・東北大学東北アジア研究センター 第 7 回学術交流連携講演会
　「アーカイブされた情報を読み解く－生態学と歴史学の最先端－」……5
　古文書調査報告会　青根温泉佐藤仁右衛門家文書の世界……6
客員教授紹介……7
著書紹介……4・6・7
活動風景　ロシア西シベリアの最近の通信事情……8
編集後記……8

巻頭言　人の流れと東北アジア

東北アジア研究センター長
岡　洋樹



ヨーロッパに殺到する難民や、アメリカの新政権による移民政策の転換が話題を集めている。近年の「グローバル化」をその背景に見る論調が多いが、越境する人の流れは別に今始まったことではない。近代以前においても、人の流れは常に存在したし、それがさまざまな問題を引き起こしもしてきた。混乱を恐れる権力者はそれをなんとかコントロールしようとして有形無形の「壁」を作ってきたし、そのたびに「壁」はやすやすと突破されてきたのである。「壁」と言えば万里の長城が有名である。現在よく知られている長城は、明の時代にモンゴル遊牧民の侵攻を防ぐために作られたものだが、長城の南北が一人の皇帝の支配下に入り、遊牧民の脅威がなくなった清の時代には、長城は二つの地域の住民の統治区分上の境へと目的を変えた。この時代、人の流れは専ら南から北へ向かう。中国本土から長城の北側、つまりモンゴル遊牧民の居住地域へと、膨大な数の移民の流れが生まれた。清朝は長城線を越えた人の往来をいっさい禁止したわけではなく、関門で出入りを把握することで流れをコントロールしようとしたのだが、当局の対応は常に後手に回らざるを得なかった。結局長城以北の地域では、とくに長城に沿った地域で住民構成が大きく変化し、文化的にも定着農耕化による変容が進んだ。この時代の史料を見ていると、内地から移住してきた漢人たちだけでなく、かつて遊牧民だったモンゴル人たちも、「村」に住み、家畜は区画された牧草地や家の敷地に設けられた柵の中で飼われるようになっていたことがわかる。このプロセスは、農業開発の進展と評価されたり、民族文化の喪失や民族対立激化の過程として悲憤慷慨されたりと、後世の評価は様々であるが、人の流れの存在自体は否定しようのない事実なのである。流れを異常な事態と考えるのか、むしろ常態だと考えるのかで、その評価や対応は異なってこようが、いずれにしても多様な住民が共生しようとするのならば、当事者の智恵が試されることは間違いないだろう。もちろん 21 世紀は 18 世紀ではない。しかし条件は異なっても、歴史を通じて共有される課題というのも存在するのである。

最近の研究会・シンポジウム等

東北アジア研究センター公開講演会
「北東アジアの環境：文化的認識と政策的関与」(12月4日)

毎年恒例となっている東北アジア研究センター公開講演会が、2016 年 12 月 4 日（土）に、東北大学川内北キャンパスマルチメディア棟 6 階大ホールにて開催されました。今回の講演会は「北東アジアの環境：文化的認識と政策的関与」と題し、講師として千葉大学名誉教授の荻原眞子先生と国立環境研究所地球環境センター気候変動リスク評価研究室室長の江守正多先生のお二人をお招きし、荻原先生からは「狩猟民世界からのメッセージ－自然界のなかの人間存在」、江守先生からは「地球温暖化と私たちの未来」と題してお話をいただきました。

荻原先生からは極東アムールの狩猟民族やアイヌの生活文化を事例として、人間とそれを取り巻く自然との関わりかたについて、特に人間と熊の関係をめぐる様々な説話伝承や習俗の事例を通じて、自然に対する様々な考え方の形成について講演を行っていただきました。

江守先生からは地球温暖化の現状と将来の予測およびリスクについて、未来のニュース番組をイメージしたシミュレーション映像や詳細なデータを交えつつ、着実に進行する地球温暖化の状況がわかりやすく示され、また国際的な環境問題への取り組みが一層本格化している昨今の情勢をふまえて、我々は地球温暖化をはじめとする環境問題にどのように取り組むべきかについて講演を行っていただきました。

両先生の講演内容は人間と環境の問題を異なるアプローチで語るものでしたが、人間の生活自体を脅かす迄になった環境問題の切実さを認識するとともに、これまで人間が抱いてきた自然との関わり方についての考え方を改めて評価するものとなりました。

当日は冬空の中多数の市民の皆さんが来場されました。さらに今回は前日より人間文化研究機構と本センターとの合同で開催されていた国際シンポジウムとあわせて来場された方もおり、両先生の講演はもとより講演後の質疑も活発に行われ、大きな盛り上がりを見せました。（上野稔弘）

人間文化研究機構 北東アジア地域研究推進事業
東北大学東北アジア研究センター拠点国際シンポジウム
「北東アジアの環境：文化的認識と政策的関与」(12月3日・4日)

Session A　環境問題への文化的認識と介入の今日的意義（12 月 3 日）

人は自然をどう認識し、どう介入することで現実を変えようとするのか？シャマニズムや狩猟儀礼をはじめとして北東アジアの民族誌はこの点における人類の着想と行為の多様性を示してきた。環境を認識し、そこに資源を見いだし利用するという営為は極めて文化的実践なのである。そうした民族誌を手がかりに、人々が行う文化／社会的実践は、現代社会とくに環境・資源問題の文脈においてどのような意義をもつのか考えるのが、このセッションの目的であった。

さらに調査研究の方法論についても視野にいれつつ、当事者である地域社会や住民の視座からみえてくる環境・資源問題の理解と対応の実像とその特質を明らかにすると共に、巨大国家の統治する北東アジア地域にみられる環境問題・資源問題の理解における文化と住民の観点からのアプローチの構築を試みた。

具体的には、このような趣旨が座長の高倉浩樹（東北大）から語られた後、国内外の研究者による四本の報告が行われた（使用言語は英語）。一本目は、英国ケンブリッジ大学スコット極地研究所のピアーズ・ビテブスキー氏による「エヴェン人トナカイ飼育民における移動と感情」、二つ目は滋賀県立大学の島村一平氏による「鉱山開発における・抗する従属的抵抗：モンゴルの金銅鉱山地域のシャマニズム活動」、三番目は中国・山東大学のコンスタンチノス・ゾルバス氏の「超自然的制裁、多元的法体制、政治的過程」、最後は九州大学の飯嶋秀治氏による「文化認識と有毒な海からの離脱の文脈」であった。

講演するピアーズ・ビテブスキー教授

ロシアとモンゴル、そこではいずれも資源開発が行われ、先住民・地域住民がこれに対応せざるを得ない事態が生まれている。それを住民の環境認識の点から民族誌的に明らかにするとともに、これに日本の水俣病の事例を合わせて考察するという異色の組み合わせだったが、地域社会の信仰的実践が資源開発への対応に重要な役割を果たしていることが共通点として確認され、刺激的な議論が行われた。（高倉浩樹）

Session B　東北アジアにおける国際環境協力のための科学とは：渡り鳥とその生息地を事例に（12 月 3 日）

本セッションでは、渡り鳥保全のための国際協力を進めるためにはどうすればいいのか、という問題意識のもとに、科学的知見や専門家コミュニティのあり方、渡り鳥に関わる条約や科学的知見、これからの協力のあり方を議論した。

まず、筆者が行った趣旨説明として、認識共同体の理論と超学際科学を取り上げた。具体的には、科学に基づいて国際協力を促進するためには、認識共同体を構築し、同共同体が科学的助言を提供するようにしなければならないことなどの教訓を説明し、それらを渡り鳥の科学アセスメントに適用した場合に想定される例を示した。次に、児矢野マリ氏からは、北東アジアにおける国際協力にかかる国際的枠組みを整理した上で、既存の協力・制度の評価と阻害要因の分析が必要であるとの課題提起がなされた。3 番目の発表者として澤祐介氏からは、NGO の国際協力の取組についての紹介や日露渡り鳥条約のもとで実施されたシジュウカラガンの日露共同保全事業の実態が説明された。次に、樋口広芳氏からは、衛星追跡を用いた渡り鳥の飛行経路などを含めた最新の科学的知見が紹介され、渡り鳥の保全のためには、そうした科学的知見と同時に、国際協力が不可欠であるとの指摘がなされた。アムール・オホーツクコンソーシアムを主催する白岩孝行氏からは、アムール・オホーツク流域にマナヅルやタンチョウの生息地と土地被覆との

シンポジウムの様子

関係についての研究などが紹介された。最後に、大泰司紀之・太子夕佳両氏から、コクガンを対象とした日露共同調査や増加したマガン対応の日露の違いの調整の必要性、アイヌによるオオワシ・オジロワシの矢羽交易、北方四島とその周辺地域における保護区の現状などの説明がなされた。

質疑応答では、保全活動を促進するために必要な科学的知見としての被害実態のデータが重要であること、渡り鳥保全は日露にとって共通利益を見出しやすいこと、認識共同体、日露生態系プログラム、ロシアとの共同保護区などの論点について、今後の協力を探る議論が展開された。

（石井 敦）

Session C　北東アジアの環境問題と環境政策（12 月 4 日）

本稿は、国際シンポジウム「「北東アジアの環境：文化的認識と政策的関与」の 2 日目に行われたエネルギーと環境政策のセッションでの 4 つの講演の内容を紹介する。

中国発展改革委員会能源研究所の朱松麗博士は、「中国における石炭産業の発展とその CO2 排出への影響」というタイトルで中国のエネルギー・温暖化問題の現状を紹介した。彼女は、現在、中国の石炭産業は、需要低迷、低価格、部門全体の財政赤字などの課題に直面しており、これが結果的に温暖化対策という意味では世界には良いニュースなっていると多少皮肉交じりに語った。

韓国中央大学のキム・チョンジン教授の講演は、中国での温室効果ガス排出権取引制度に関するものであった。彼は、石油精製、鉄鋼、化学薬品、セメントなどの産業を含む全国レベルでの制度が 2017 年から開始されれば、大気汚染も緩和される可能性があることを示した。

アジア開発銀行の呂学都博士は、アジアの途上国がパリ協定の目標を達成する上で直面する課題として、低価格な低炭素技術や政策・規制の欠如を挙げた。同時に、優先分野の選定、技術移転の促進、多様な資金ツールの活用、規制と政策の強化などの必要性を強調した。

EU/UK 中国経済教会のクリスチャン・プロバーガー博士は、地域協力に注目しながら国境を越える環境汚染問題について語った。彼は、東南アジア諸国連合における越境大気汚染対策の枠組みを例にあげて、東アジアでも、黄砂などの問題に対してそのような枠組みが必要と述べた。また、メコン川のような国境を越えた水源を巡る問題にも触れた。

講演するアジア開発銀行気候変動問題アドバイザーの呂学都博士

いずれの発表も、環境問題を国際的な問題として捉え、その克服のためには具体的に何が必要かを考えさせるものであった。しかし、現実として、どの国においても環境問題の政治的な優先順位が低く、まず政治家や一般市民の意識を高めることが必要であることを知らしめる内容でもあった。

（明日香壽川）

東北大学東北アジア研究センター
「東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット」
第４回・第５回・第６回共催講演会

９月 15 日　第４回講演会

「中国における温室効果ガス排出量取引制度の現状と課題」

９月 15 日、東北大学東京サイトにて、東北大学東北アジア研究センター「東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット」と中国環境問題研究会との共催による第４回講演会が開催された。講演会では科学技術振興機構中国総合研究交流センター・フェローの金振氏をお招きし、中国の排出量取引制度の最新動向や課題などについてお話しいただいた。

地球温暖化問題が深刻化する中、中国は温室効果ガスの排出削減を迫られている。中国政府は、第 12 次五か年計画（2011 ― 2015 年）では 2011 年から 2015 年にかけて GDP 単位当たり CO2 排出量を 17％削減する目標を上げ、2011 年末に汚染物質排出量削減対策として排出量取引制度を導入すると発表した。そのパイロット事業として、中国の 2 省（広東省、湖北省）及び 5 都市（北京、天津、上海、重慶、深セン）にて事業が展開され、2017 年には全国的な排出量取引市場の構築を目指している。2011 年からパイロット事業を展開してきた経験があるとは言え、その制度設計の詳細や効果は明確にはなっていない。金氏は 2013 年から 2016 年までの取引市場における取引総量、価格変動、義務履行率などのデータを用いて中国排出量取引制度に対する全体評価や課題についてお話しされた。

金振氏の講演

10 月 30 日　第５回講演会

「中国黄土高原山西省大同市における植林ボランティアの活動が環境政策に与えた影響」

10 月 30 日、東京外国語大学本郷サテライトにて、東北大学東北アジア研究センター「東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット」と中国環境問題研究会との共催による第５回講演会が開催された。講演会では立命館大学文学部の松永光平氏をお招きし、中国黄土高原に位置する山西省大同市における植林ボランティア活動及び環境再生事業への影響などについてお話しいただいた。

山西省大同市はかつて北魏の都であって、森林に覆われていたが三逃田（水・土・肥料が逃げる畑）が広がる荒れた土へと変貌したと言われたところである。1991 年、同市渾源県が緑化対象地として推薦されたことを契機に、1992 年１月に、日本の認定特定非営利活動（NPO）法人緑の地球ネットワーク（GEN）が結成され、現地での緑化活動を観察した上で、植林ボランティア活動を始めた。松永氏は現地での調査により、日本の NGO（GEN）と現地の諸団体・個人との連携による植林活動が、中国政府主導の退耕還林等の環境再生事業などに対して呼び水効果を及ぼしたと強調した。報告に対して、植林技術と植林管理、環境改善と住民の収入向上面での植林活動への評価方法などについて議論がなされた。

11 月 25 日　第６回講演会

「中国山西省の石炭採掘と富・災難の分配」

11 月 25 日、東北大学東京サイトにて、東北大学東北アジア研究センター「東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット」と中国環境問題研究会との共催による第６回講演会が開催された。講演会では中国南京大学の張玉林氏をお招きし、中国山西省を中心に石炭採掘に伴う経済成長と富の分配、生態・環境災難などについてお話しいただいた。

石炭依存の中国において、石炭使用が「霧霾」（スモッグ）と CO2 排出の最大原因となり重要視されているが、石炭使用の前段階である石炭生産地においてもすでに深刻な生態破壊が引き起こされている。張氏はそれに注目し、エネルギー・環境と社会公正の視点を軸に、中国の石炭主産地である山西省を取り上げ、石炭採掘に伴う利益の分配（中央政府と地方政府、都市と農村、一般住民と直接利得者の間）と災難（河川の枯渇、耕地の廃棄、地盤の沈下など）の分布状況を考察した。「地質災害」に対して政府の「治理」（整備、修復、救済）が行われているものの、計画の難航に伴う中国式の「ガバナンス危機」についても語られた。（金 丹）

BOOKS 著書紹介　センター関連出版物

サンピルドンドヴ・チョローン、胡日査、アドリアン・ボリソフ、岡洋樹編
2016年12月刊

東北アジア研究センター報告22号

ЕВРОАЗИЙН НҮҮДЛИЙН АЖ АХУЙ　Түүх, Соёл, Хүрээлэх орчин

（モンゴル文図書、訳題『ユーラシアの遊牧：歴史・文化・環境』）

本書は、平成 24 年９月にモンゴル国ウラーンバートルで本センターがモンゴル科学アカデミー歴史考古学研究所、中国内蒙古師範大学旅游学院、ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学北方民族問題研究所と共催した国際シンポジウム「ユーラシアの遊牧：歴史・文化・環境」に提出された研究報告 22 件を収録した論文集である。モンゴルでのシンポジウムは、2003 年の第一回から数えて今回で六回目となる。今回は、ユーラシアの遊牧文化を、歴史・文化ばかりでなく、ツーリズムの対象としての意義や、環境の観点から議論を行った。とくに今回ははじめてロシア連邦サハ共和国からアドリアン・ボリソフ博士を初めとする四名の研究者が参加し、ステップ地帯の遊牧とは異なる特色をもつシベリアの森林地帯の牧畜を扱う発表を得たことで、モンゴルや内モンゴルの牧畜の理解においても新たな視野を得た会議となった。モンゴルからは歴史研究所（現歴史学考古学研究所）長 S. チョローン博士、中国からは内蒙古師範大学旅游学院の胡日査博士、ロシアからは人文学北方民族問題研究所の A. ボリソフ博士、日本からは本センターの岡洋樹教授が編集者となった。（岡洋樹）

東北アジア研究センター共同研究
「東日本大震災後のコミュニティ再生・創生プロセスと持続可能性に関する実証的共同研究」2016 年度第 2 回研究会
(12 月 23 日)

共同研究「東日本大震災後のコミュニティ再生・創生プロセスと持続可能性に関する実証的共同研究」では、2016 年度第 2 回研究会を 12 月 23 日に東北アジア研究センターにて開催した。

今回の研究会は、映像やアートプロジェクトによる東日本大震災の記録をテーマとして行った。震災体験の記録をどのように保存、発信するかという問題は、本共同研究のアウトプット方法に関わることであり、社会人類学者、アートディレクター、自主避難者、ボランティアコーディネーターなどが製作した映像などを検討した。

高倉浩樹氏 (東北大学) は、映像民族誌「宮城県山元町における震災 5 年目の神楽お面の仮奉納と慰霊」について報告した。津波で流された神楽お面を奉納、慰霊祭の様子を記録したものである。野口靖氏（東京工芸大学）は、「原発事故の情報公開とアートプロジェクト（仮）」と題して、食品中に含まれる放射性物質の濃度を地図上に表す HP、「核についてのいくつかの問」というアートプロジェクトについて報告した。武田直樹氏（筑波学院大学）、田部文厚氏は「つくば市での避難者支援この 5 年」映像アーカイブ制作の意義について報告した。つくば市で避難者を支える人々の話を記録したものである。これらの発表では、多様な人々の被災経験、避難者を支える人々の体験、5 年を経過した被災地の様子などが映し出された。

参加者一同の記念撮影

参加者は、共同研究メンバーに加え学外者を含めて 17 名であり、活発な議論が交わされた。東日本大震災から 5 年を経て被災地調査を継続している研究者同士の交流が活発に行われ、今後の共同研究の基礎を築けた。本共同研究の母体となった「災害と地域文化遺産に関わる応用人文学研究ユニット」（代表：高倉浩樹）は本年度をもって終了となるが、東北大学の災害研究の人文学における研究、交流拠点としての地位を確立できた。これまでの研究成果をまとめた論集の企画も現在進行中である。（山口睦）

伊達市噴火湾文化研究所・東北大学東北アジア研究センター 第 7 回学術交流連携講演会
「アーカイブされた情報を読み解く ー生態学と歴史学の最先端ー」 (12 月 17 日)

講演会場のようす（友田講演）

当センターは、毎年伊達市噴火湾文化研究所と共同で学術交流連携講演会を開催しているが、その 7 回目が、2016 年 12 月 17 日、伊達市だて歴史の杜カルチャーセンターで開催された。今回はセンターから准教授の鹿野秀一氏、そして、私、友田昌宏が演台に立った。

第一講演の鹿野「西シベリアの湿地生態系―食物網内でたがいに結びつく生物たち―」は、西シベリアのチャニー湖における生物の食物網を、安定同位体比を用いて分析し、そのうえで生物の体内に生息する寄生虫を食物網のなかに組み込むことによって、同地域の生態系を新たな視座から考察するという内容であった。

続く第二講演の友田「岩出山伊達家の北海道開拓移住―吾妻家文書の調査から―」は、近年、当センターの上廣歴史資料学研究部門が岩出山古文書を読む会と共同で行っている吾妻家文書の整理・調査の成果を反映させたものである。吾妻家は仙台藩主伊達家の一門である岩出山伊達家に仕え、代々家老を務めた家柄である。幕末・明治期の当主・吾妻謙（ゆずる）は、維新後に行われた旧岩出山伊達家中の北海道開拓移住に中心的役割を果たした人物としてとりわけ有名である。報告では、吾妻謙にとっての北海道開拓移住の意味、旧岩出山伊達家中が当別（現在の北海道石狩郡当別町）に入植するまでの紆余曲折、さらには入植後の吾妻がどのように開拓を軌道に乗せ、その成功の報いをどのような形で旧家中の人びとや旧主家に還元したかについて、史料に則して考察した。

この学術交流講演会は、市民のみなさまのあいだに徐々に浸透しているとみえ、今回はこれまで以上の来場者に恵まれた。伊達市とのつながりは、私が所属する上廣歴史資料学研究部門の仕事のなかでも、今後生かされていくであろう。活動のフィールドを広げるという意味において、私たち部門にとっても今回の講演会は得難い機会となった。

（友田昌宏）

古文書調査報告会

青根温泉佐藤仁右衛門家文書の世界（12 月 8 日）

2016 年 12 月 8 日、宮城県柴田郡川崎町青根温泉の旅館「湯元　不忘閣」の大広間にて、「古文書調査報告会　青根温泉佐藤仁右衛門家の世界」を開催した。主催は東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門（以下「上廣部門」）、後援は NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク、協力は川崎町教育委員会・川崎町歴史友の会・川崎町文化財保護委員会である。

青根温泉は蔵王山麓に位置し、江戸時代には仙台藩主伊達家がたびたび訪れた温泉である。佐藤仁右衛門家は 16 世紀に青根温泉を発見し、温泉旅館を経営するかたわら、江戸時代には温泉管理人の湯守をつとめた。大正時代には川崎村の村長などを歴任している。上廣部門では、高橋が NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワークらと共に 2012 年より佐藤家の古文書調査（第一次調査）に携わり、解読から明らかになった青根温泉の新たな歴史を刊行物・展示・講演会などで発表してきた。その経過はセンターニューズレターでも折々報告している。

今回の古文書調査報告会は、2015 年 9 月以降の第二次調査の途中経過と成果をお伝えするために開催した。報告タイトル等は以下の通りである。

開会の挨拶　平川新（上廣部門長・宮城学院女子大学長）
報告①「佐藤仁右衛門家の古文書～地域の宝を調べる、読み解く～」
　高橋陽一（東北アジア研究センター上廣部門）
報告②「不忘閣のめでた掛け」
　安田容子（東北大学災害科学国際研究所）
報告③テーマ「青根温泉の古文書が語る宮城の歴史」
「青根温泉不忘閣の秘密」
　佐々木結恵（宮城学院女子大学大学院修士課程　学生）
「天保飢饉と佐藤仁右衛門家」
　今井亜希（宮城学院女子大学大学院修士課程　学生）
「地域の中の戊辰戦争～青根温泉・佐藤仁右衛門家の事例をもとに～」
　高橋直道（東北大学文学部　学生）
「佐藤仁右衛門家に伝わる明治三陸地震と明治宮城県沖地震の記録」
　井上瑠菜（宮城学院女子大学大学院修士課程　学生）
閉会の挨拶　大宮金治（川崎町文化財保護員長）
　小山修作（川崎町長）

現在、調査では古文書の撮影を実施しているが、学生や川崎町民が加わり、若者や一般市民参加型の調査になっているのが特徴である。本報告会でも学生 4 名が佐藤家文書の中から興味のある史料を取り上げ、発表してくれた。時間は各 10 分ほどであったが、自らが調べたことを公の場で発表する、よい機会になったのではないだろうか。

佐藤仁右衛門家（「湯元　不忘閣」）

報告会のようす

第二次調査で確認された古文書は収納箱約 100 箱分に上り、撮影は 6 割程度が終了したところである。年代は明治時代以降のものが多いが、佐藤家のみならず青根温泉や川崎町の歴史も明らかにできる、地域の宝ともいえる史料である。飢饉や地震といった災害に関する古文書も含まれている。今回の報告で、高橋は明治時代の佐藤家当主が記した家訓を紹介したが、そこでは天明・天保といった江戸時代の飢饉の惨状を引き合いに貯蓄の必要性が説かれていた。過去の災害が教訓的に記録として語り継がれ、実際の災害への備えに生かされていたのである。家の存続のため、または社会全体の記憶として古文書を受け継いでいく意味を見出すことができよう。

報告会の参加者は 40 人ほどであった。その様子は『河北新報』2016 年 12 月 13 日の朝刊で報道された。先述した明治時代の家訓が「過去の人も過去に学んだ」という見出しで紹介されている。佐藤家文書の調査は今後も継続する予定であり、新たな郷土の歴史についてお知らせし、地域のみなさまとざっくばらんに語り合う場として、これからもこうした機会を設けたいと考えている。ご参加いただいた方々、協賛いただいた川崎町の関係各位、お忙しいなか会場を提供してくださった不忘閣のみなさまに心より御礼申し上げたい。（高橋陽一）

BOOKS 著書紹介　センター関連出版物

風戸真理・尾崎孝宏・高倉浩樹編
2016年12月刊

叢書第58号

『モンゴル牧畜社会をめぐるモノの生産・流通・消費』

本書の目的はモンゴル系の人びとの牧畜の文化に根ざしたモノである畜産物の生産・流通・消費に着眼して、モンゴル高原地域における物流システムの特徴とその変化を、国家の体制およびグローバルな経済システムとの関係のなかで検討することにある。執筆陣の学問的なバックグラウンドは大半が文化人類学であり、各章ではゲルの壁や屋根として使用する住居フェルトおよび原材料となる羊毛（風戸論文）、社会主義時代の国家調達によって域外への流通を開始した乳製品（冨田論文）、市場経済の浸透で流通を開始した馬乳酒と今なお流通しない蒸留乳酒（尾崎・森永論文）、インフォーマルな運行によって物資や人の移動を担う長距離ドライバー（寺尾論文）モンゴル国の牧畜民世帯における購入以外の流通経路（例：贈与・譲与）と貸借によるモノの排他的な独占を伴わない消費（堀田論文）が取り上げられている。本書を通じて、近代的制度がモンゴル牧畜民に対して及ぼす影響力の範囲は総じて拡大している一方で、牧畜民は可能な限り自らの持つ文化的ストックを利用しつつ対応してきたこと、また彼らは必ずしも専業化という形で経済効率を追求しない傾向を示すことなどが明らかにされている。（鹿児島大学教授　尾崎孝宏）

客員教授紹介

●客員教授

ニコ・ジョバンニ教授

私は 2017 年 1 月から 3 月まで、外国人研究員として佐藤研究室に着任したニコ・ジョバンニです。私は衛星搭載、地上設置などの合成開口レーダ（SAR）の信号処理について研究しているイタリア国立学術会議応用数学研究所（CNR-IAC）の研究員であり、また SAR 分野のスピンオフである DIAN 社 の共同設立者でもあります。

私は 2013 年に佐藤教授が非常に意欲的に取り組み優れた成果を出している地表設置型合成開口レーダ（GB-SAR）の研究分野での共同研究を提案しました。今回の滞在中、佐藤研究室の皆さんと SAR データの取得やデータ処理に関する討論の機会を持つ事が出来ました。特に SAR の信号処理と SAR の適用について、地すべり及びインフラのモニタリングのために、私の新しいレーダ処理技術とアプリケーションに関する研究やブレーンストーミングを行っています。その結果について研究発表や国際ジャーナルにも投稿予定です。また佐藤先生が行っている熊本の地滑りモニタリングプロジェクトにも参加させて頂いた事は非常に貴重な経験となりました。今後、日本や他のアジア諸国に私の研究活動を広げるきっかけとなりました。近い将来 CNR-IAC と DIAN が東北大学と共同プロジェクトが出来ればと思っております。

（訳：佐藤源之）

●客員教授

セルゲイ・パプコフ教授

1986 年からロシア科学アカデミーシベリア支部歴史研究所に勤務しております。時間の大半を費やし現在も打ち込んでいる研究は地方におけるスターリン体制です。『ありふれたテロル。シベリアにおけるスターリニズムの政治』（2012 年）など数冊の著作を発表しました。2004 年にはルール大学（独）に招かれ、スターリン時代のテロルに関する共同研究を行い、成果を独露語の著作で発表しました。初めての東北アジア研究センターでの（2005 ― 06 年）滞在は、数篇の論文に結実した非常に実り多いものでしたが、それに劣らず重要なのは当センター研究者との長年にわたる創造的な関係を構築し、共同で学術セミナーを開催し、三冊もの論文集を刊行できたことです。

今回再訪する機会に恵まれた仙台市はこの間、目に見えて変化し、改めてさらに強烈な印象を受けております。壮大な新しい高層建築の数々、立派な先進的地下鉄、新たな街の景観、これらすべては都市や国家のダイナミックな発展を示すものです。当センターでの滞在中、ロシアや隣接諸国の諸民族の歴史研究に関して、我々のコンタクトを拡大し、過去の複雑な過程に客観的に光を当てるため、新たな接近方法をともに探求し続けることを期待しています。　（訳：寺山恭輔）

BOOKS 著書紹介　センター関連出版物

岩本由輝・多田宏・佐藤大介・泉田邦彦・高倉浩樹編
2016年12月刊

東北アジア研究センター報告第23号

『旧陸奥中村藩山中郷基本資料』

本書は、現在の福島県飯舘村や浪江町などを中心とする、陸奥中村藩――一般的には相馬藩の呼び名が普及している―の広域行政単位だった「山中郷」に関する、書名通りの基本資料である。土地開発などを契機に領地を与えられた郷士たち 126 家の系図と、郷内に属した各村の基本的な情報がまとめられた古文書が収録されている。原文書は「3.11」の後にレスキューされたものであった。すなわち、原発被災地となった山中郷の歴史を知る手がかりは、間一髪で消滅の危機を免れたのである。

本書は、山中郷には人々が数百年に渡って営んできた暮らしと、その中で自然と向き合うことで作られた伝承などの文化があるという存在証明としての意義を持っている。そのことは、逆に「3.11」が何を奪ったのかを浮き彫りにする。もちろん、そこに暮らしていた人びとにとっては、自らのよりどころを知る手がかりとして、「3.11」からの時間の経過とともにその役割を増していくことだろう。それでも、「山中郷」の歴史は続くのである。

本書は、相馬にゆかりのある経済史学者の岩本由輝氏と、岩本氏と旧知の飯舘村の多田宏氏の協働がきっかけで世に出された。災害時における人文研究者の役割、地元住民との継続的な交流の意味を考えさせられる。また編集に関わった高倉、泉田、佐藤、および書籍設計を担当した蕃山房只野俊裕氏の 4 名は、偶然にも福島県出身であった。科学者としては適切ではないのかもしれないが、歴史資料の持つ力に呼び寄せられた、などとも考えてしまう。

（災害科学国際研究所准教授　佐藤大介）

活動風景

ロシア西シベリアの最近の通信事情

東北アジア研究センター准教授　鹿野　秀一

ロシア西シベリアにおいても、電話やインターネットの通信環境が年年変化しているので、最近の通信事情について記してみたい。その前に、西シベリアにおけるこれまでの研究の経緯と調査地域について簡単に述べたい。私たちは、2001 年からほぼ毎年夏に西シベリア南部のチャニー湖周辺でロシア科学アカデミー・シベリア支部・動物分類学生態学研究所の研究者と協同で、湿地生態系の食物網について炭素・窒素安定同位体分析という手法を用いて研究を行っていて、最近はこれに寄生虫も組み込む試みを進めている。動物分類学生態学研究所のチャニー湖野外研究施設へ車で行くには、西シベリアの中心都市であるノボシビルスクからオビ川を渡りシベリア鉄道沿いに西に約 300 km 移動し、そこから約 100km 南下して、さらに未舗装の道を約 40 km 行く必要がある。そこはシラカバ林が点在する平原と広大な湿地との際である。

ロシアでの調査が始まった 2002 年ころの通信事情は今とは大きくかけ離れていた。たとえば、野外施設から 100 km ほど離れたチャニー湖の島へモータボートで調査へ出かけた時は、大きな長波長の無線機を持って行き、定時連絡をしていた。連絡する時は、4 ～ 5 m の棒にアンテナ線を付けたものを立てる必要があった。それから数年後になると、ロシア人研究者は初期の小型携帯電話が使うようになり、その後次の世代の携帯電話に機種が変わっていった。まだこの頃は、2 週間程度の調査に私たち自身の携帯電話を持つことやインターネットに接続することは考えていなかった。

ところが 2010 年代に入ると、ロシアで使える無線ルータを日本でレンタルして持って行くことができるようになり、2013 年夏には実際に使ってみた。ノボシビルスク市内や電波状況のいい所では第 3 世代の G3 通信が利用できたが、チャニー湖の野外施設では電波が弱く、使う場所を選ぶ必要があった。電波が捕まらないときは、高さ 5 m ほどの給水塔に登ると（写真 1）、9 km 先にある小さな村の電波塔が見えて、通信がなんとかできる。ただし、このルータは日本でレンタルすると 2 週間で料金は 19,000 円もする（2016 年でも同じ）。

ロシア人研究者に聞くとロシアの通信費はこの 10 分の 1 以下とのことなので、2016 年の夏には、ロシアのプリペイド SIM カードを試してみた。ロシアでの通信事業者は、Beeline、MegaFon、MTS の大手 3 社があるが、チャニー湖周辺では MegaFon と Beeline が比較的電波状況がいいので、今回は iPhone 6（SIM ロックフリー版）用に MegaFon のプリペイド SIM カードを購入した（写真 2）。購入には、使用期間、通信量、電話通話の有無、SIM カードのサイズを聞かれ、パスポートを提示すると手続きをしてくれる。ただし、ノボシビルスク市内のショップでも英語は通じずロシア語ができる人と行かないと手続きは難しい。日本で使っている格安 SIM カードは私自身が抜いて、iPhone 6 を店員に渡すと新しい SIM カードを挿入して作動を確認後に、電話通話用の番号を教えてくれた。ただ、APN 設定 3 項目ほどを MegaFon 用に変更する必要があることが後で分かり、ネットで調べるのに少し手間取った。APN 設定については店員に忘れずに確認する必要がある。この SIM カードは最新の第 4 世代通信（4G）に対応していて、ノボシビルスク市内だと 4G で接続できるのだが、野外施設周辺では未だに電波な弱く、状況が悪いと第 3 世代の 3G どころかその前の 2G でも繋がらないので、その時は先ほどの給水塔に登ることになる。しかし、ここの通信事情もどんどん改善されて行くことだろう。このように、西シベリアの田舎にいてもスマートフォーからインターネットに接続できる時代になったが、仕事がメールでシベリアまでも追いかけてくる状況にもなった。

◀チャニー湖の実験施設の給水塔。電波が弱いと、皆ここに登り通信を試す。

◀ロシアのプリペイド SIM カード。1 ヶ月通話付き通信量無制限で 450 ルーブル（約 800 円）と日本の格安 SIM の半額以下。

編集後記

昨秋ウズベキスタンでロシア人とウクライナ人の老婦人 3 名から異口同音に聞いた言葉：「ロシアとウクライナは元来同じルーシ国だ。一体何のためにあんなに憎み合うのか？」そして、歴史はまさしくその通りです。大学は、メディアの論調に警戒することを次世代に引き継がねばなりません。東西冷戦時、プロパガンダは東側の専売特許ではありませんでした。そして、そのことは現在もなお全く変わっていないのです。（柳田賢二）

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター 第 72 号　2017 年 3 月 29 日発行

編集　東北アジア研究センター広報情報委員会
発行　東北大学東北アジア研究センター　〒 980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41
TEL 022-795 - 6009　FAX 022-795 - 6010　http://www.cneas.tohoku.ac.jp/

植物油インキを使用し、環境にやさしい水なし印刷方式を採用しています。